

「生を明らめ死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり」

「生きる」ということはどういうことなのか、「死」とはどういうことなのか、これが仏教の最も大事な問題である

この文章から、『修証義』は始まります。

『修証義』とは、1890年・明治二十三年に定められた、五章 三十一節からなる曹洞宗のお経です。修証義の修は修行の「修」、証は「証明する」の「証」、義は「定義」の「義」で意味、ということになります。

『修証義』のベースは、道元禅師が著された『正法眼蔵』にあります。各章のテーマに沿った文章を『正法眼蔵』の中から選び、道元禅師の流麗な文章はそのままに、テーマの流れに合うように、再構成されたものです。

言うなれば、『修証義』は、著者・道元禅師、編集・明治時代の曹洞宗、といえるでしょう。

先ほど、冒頭にある「生を明らめ死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり」をご紹介しましたが、この一文が『修証義』全体の大きなテーマになっています。

お釈迦さまの出家も、「生きること」や「死」の問題に直面し、それに苦悩したことが出発点になっています。その問題に悩んだとき、仏教が「生きること」や「死」を最大の問題にしていることを知ることで、私たちは仏教と出会うことができるのです。

『修証義』は、仏教と出会った私たちが、どのようにして出会いを深めていけばいいのかを示しているお経です。

その出会いの深め方は、それぞれの章の内容と、配列によって示されています。

まず、序章に当たる第一章で修証義全体のテーマを提示します。

次に、第二章で自らの過ちを悔い、自分を見つめ直すことを説き、第三章では戒律を受け、お釈迦さまの教えのままに生きるべきことを説いています。

続いて、第四章で他者への慈しみの心をもった生き方を示し、第五章では、仏法を伝えてくださった祖師方への感謝報恩としての修行を説いています。

仏教と出会い、自分を見つめ直し、決まりを守り、自らの生き方を転換し、一日一日を、大切に生きる。

みなさん、まず『修証義』にふれてみてください。そして、声に出して読んでみてください。そこには仏教との出会いが待っているのです。